



# 説得の論理を読む

## 「モアイは語る―地球の未来」(二年)を例に

山梨学院短期大学講師 松野 洋人

過去三回、文学的な文章の教材研究の在り方について考えてきましたので、今回は説明的な文章(以下、「説明文」と呼ぶ。)を取り上げてみます。

光村の教科書では、各学年の第二・第五単元に説明文の単元を配置しています。因みに、第一・第二学年の単元の目標は、次のように示されています。

- ・「文章のまとまりに着目し、構成をとらえる」(二年・第二)
- ・「事実をとらえ、正確に伝える」(二年・第五)
- ・「事実と考察を区別して読み、文化について見方を広げる」(二年・第二)

・筆者の意見をとらえ、説得力のある表現を学ぶ」(二年・第五) 説明文は、概ね「事実性の強い説明文」と「意見性の強い説明文」とに区分することができそうですが、意見性の強い説明文として中学校で最初に出会う、第二学年の第五単元の教材「モアイは語る―地球の未来」を今回は取り上げてみたいと思います。

です。そのような観点に立つてこの教材を読むと、興味深い文章構造が見えてきます。

まず気付くのは、イースター島の文明崩壊について書かれている「段落から十五段落までの前半部分」が、十六段落以後の筆者の主張部分の根拠になっているという点です。つまり、文章全体が大きく主張と根拠の関係になっているのです。

次に、イースター島の文明崩壊について書かれている前半部分に焦点をあててみましょう。「二段落に「像をだれが作ったのか／像をどのように運んだのか／モアイが作られなくなったのはなぜか／モアイを作った文明はどうなったのか」という、モアイに関する四つの問題が提起されています。これらについては、三段落、九・十段落、十四・十五段落などを中心に、事実や根拠を示しつつ説明されています。

筆者の主張が述べられている後半部分についても、前掲の主張を支えているのは、十八・十九段落に示されている事実や根拠です。

このように、前半・後半それぞれの部分も、結論や意見が、それぞれ事実や根拠によつて裏付けされ、説得力のある文章になっているのです。この事実や根拠の読み取りが、この教材では授業の中心的作業となるのです。

筆者の主張に対する読み手としての考えについて、作文やスピーチなどの形で発表させることも、必ず位置づけたい学習です。

## 2 「書く」への能力転移

目標に沿つて学習を焦点化するためには、学習を総合化することは極力避けたいというのが私の基本認識ですが、説明文の授業については、例外的に、「読むこと」と「書くこと」の学習を関連させて指導することが望ましいと考えています。

## 1 事実や根拠を精査

言葉の学習にとつて「繰り返し」は大切ですが、説明文の授業といえども「要約」「構成」「要旨」というのでは、生徒の学習意欲は減退しますし、何よりも幅広い言葉の力を付けることは不可能です。従つて、系統性・発展性に配慮した学習を組織する必要があります。

前項でも触れたように、この教材は「意見性の強い説明文」ですから、まず確認すべきは筆者の主張です。それが述べられているのは十六段落以後であり、さらに突き詰めれば、「とするならば、わたしたちは、今あるこの有限の資源をできるだけ効率よく、長期にわたつて利用する方策を考えなければなりません。それが、人類の生き延びる道なのである。」という二十段落最後の二文です。

しかし、これが筆者の主張であると分かつていても、それだけでは、読み手の心を動かし、共感や納得を得るのは困難です。主張を支えている事実や根拠を精査する必要性がそこに生まれるの

「関連」といつても、私が本稿で提唱したいのは、「筆者の主張に対する感想や意見を書く」「『自然との共生』について考えを書く」といった、「内容」を軸とした関連ではありません。「方法」を軸とした関連を重視したいのです。

本教材を例にすれば、読みの目標は、「説得力のある表現」即ち「事実や根拠」を確認しながら「筆者の意見を読み取る」ということですが、この読みの学習で学んだ、「事実や根拠」を明確にした「説得力のある表現」方法を、書く学習に生かすということです。

教科書も、「モアイは語る―地球の未来」の後に、「根拠を明らかにして書く」という「書くこと」の教材を設定していますが、このような配置こそが望ましいのです。この教材では、学習の手順や参考例文などが示され、生徒が学習しやすいように工夫されていますが、とりわけ、「テーマ例」と、「学習の窓」欄の「明確な意見文を書くための工夫」は、書く際の参考になるものです。「テーマ例」については、なかなか題材を決められない生徒もいますので、教科書所載の例以外にも、生徒が興味・関心をもちそうなテーマの例を、教師は幾つか考えておくといひでしょう。

ここまで、本教材の学習では、読みの段階でも書きの段階でも、意見の裏付けとしての「事実や根拠に焦点をあてる」ことの重要性について述べてきました。それは、そのような言語能力の育成こそが、「言語の教育」としての国語科の避けられない使命だからです。しかし、生徒の読みのエネルギーは、内容に刺激されて生まれるものです。謎解きの魅力をもつ本教材は、そのような観点からも優れた教材だと思えます。内容に対する生徒の興味・関心を学習エネルギーとしつつ、言語能力の育成を図る授業を工夫したいものです。